

ベッドの

おとぎばなし

森瑤子

Fiabe di Letto



文春文庫

ベッドのおとぎばなし

定価はカバーに
表示してあります

1989年3月10日 第1刷

1995年3月20日 第18刷

著 者 森 瑤子

発行者 堤 堯

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-743603-5

文 春 文 庫

ベッドのおとぎばなし

森 瑤 子



文 藝 春 秋

ベッドのおとぎばなし・目次

第一夜	俄か雨	9
第二夜	クレジットカード	20
第三夜	ブラデイー・メリー	32
第四夜	二十五時	45
第五夜	金曜日の男	57
第六夜	女友だち	69
第七夜	嘘	82

第八夜	オフィス・ラブ	94
第九夜	夜の編集室	107
第十夜	同窓会	119
第十一夜	友だちの夫	131
第十二夜	女心	144
第十三夜	クリスマス・イヴ	157
第十四夜	髪切屋	168
第十五夜	翡翠の耳飾り	179
第十六夜	猫とアレグリア	191

第十七夜	空車待ち	203
第十八夜	ささやかな幸福	216
第十九夜	恋の相手	228
第二十夜	カップルズ	240
第二十一夜	前に、どこかで	252
第二十二夜	クレイジー・ナイト	265
第二十三夜	鏡の中の女	278
第二十四夜	真夜中の電話	288
第二十五夜	結婚記念日	300

第二十六夜	姉妹	312
第二十七夜	春の嵐	324
第二十八夜	バラの棘	337
第二十九夜	匂い	350
第三十夜	海と風と	362
第三十一夜	幸せの風景	374
第三十二夜	一方通行	386
第三十三夜	汚れた爪	398
エピローグ	ベッドの中へ	410
解説	早瀬圭一	422

ベッドのおとぎばなし

俄^{にわ}か雨

第一夜

地下鉄の階段を降りてくる男女の髪や顔が濡れている。狭い通路をすれ違い際^{ぎわ}、男たちが湿った衣服から、獣めいたにおいを残していく。

家を出た時には、そうたくさんではないが星が見えていたくらいだから傘などの用意はない。地上に出きらないうちに、両側のスペースから激しい雨の飛沫^{しぶき}が吹きこんでくる。階段は、飛びこんでくる通行人と、雨足に咄嗟^{とつさ}の出足を奪われて立ちすくんでいる地下鉄から降りた客とで、ごったがえしている。

後から昇ってくる人の波に無理矢理に押し出されるような格好で、美也子は交差点側の歩道に立ち、一瞬の判断で六メートル程左先にある本屋の軒先に駆け込んだ。

六メートルも、どしゃ降りの中を走らなければならなかったのは、すぐ目の前の果物屋の軒先には既に先客があたかもグレープフルーツみたい^なに鈴生^なりだったし、隣りの煙草屋の申しわけ程度についているキャンパスの底^{ひきし}の下にも肩を重ねるようにサラリーマンふうの男たちが群がっていたからだだった。

薄手のウールのジャケットを通して、雨は彼女の肩先を冷たく濡らし、髪は額や項^{うなじ}に海草の

ようにへばりついた。

生きていく過程には耐えられないほど嫌なことがいくつもあるけれど、洋服を着ている状態でどしゃ降りの雨にずぶぬれになるくらい、惨めなことはない、と、美也子は本屋の軒先で、頬を伝わり落ちる雫を掌で拭いながら思った。

本屋の店員たちがいち早く、軒先にせり出して並べてある雑誌の類の上に、透明ビニールのシートをかぶせて止めている。

髪から雫をたらした男が、店内の狭い通路に入りこもうとするのを、店主らしい男が、お客さん、堪忍して下さいよ、本が濡れちゃこっちは商売にならないんだと、文句を言う。男は苦笑して後退り、肩をすぼめるように軒先の一団に加わる。

店内で堂々と立ち読みをしているのは、俄か雨が降りだす前からそこでそうやって只で本を読んでいた連中で、何もそう威張ることなどないのに、全員が全員、眼の隅に優越感のようなものを滲ませて、軒先の雨宿り客たちをちらちらと見ている。

軒下は、一人、二人と新たに駆け込んでくる新客で、ほとんど満杯の状態。前後左右の人の腕や背中や腰、脇腹が、それぞれ自分の軀のどこかにぴったりと押しつけられている。

湿った衣服を通すせいで、他人の肉の温かさが、必要以上に熱く感じられて、不快なことこの上もない。

女たちの髪から立ち昇るにおいにも閉口するし、ウールのセーターや背広が湿った時に発する悪臭もすさまじい。美也子は呪わしげに夜の暗い雨空を見上げた。

「すぐに止みますよ」と、不意に左斜め上で男の声がする。彼女に軽く脇腹を押しつけていた

長身の男だ。もっともそちらから言えば美也子はその男の脇腹のあたりに腕を押しつけている、ともいえるのだが。要するにお互いさまなのだ。

「そうかしら」男の顔を、すくいあげるような眼で見ながら美也子がわざと疑わしそうに呟いた。適当に距離を置いた言い方だが、必ずしもつき放すようなニュアンスがないのは、最初の瞥で彼が自分の好みの男の範疇に入ると見てとったからだ。

美也子は三十を幾つか過ぎたたたかな女だし、その男にもどこか彼女によく似た得体の知れない感じがあった。

結婚をしているのかしていないのか定かでないとか、職業もサラリーマンのような定職があるふうにも見えないという感じ。金をもっている人種なのか、金をもっていないそうなのは見せかけなのか。

男は極く薄手のイタリア製らしいカーフのジャンパーを無造作に着ている。ファスナーを喉のところまで引き上げているので、下に着ているものはわからないが、ズボンは少し濃い目の茶色。

もし生れつきの地黒でなければ、季節外れの日焼けにはたっぷりお金がかかっているはずだった。

二人は同類なのだ。雨が引きあわせた偶然で、腕と脇腹をびったりと寄せ合いながら、ほとんど同時にお互いに相手に対してそれを意識する。同じ種類の人間だということを。すると奇妙なことに、背中や腰に張りついている他の有象無象の肉の温かみは意識から消え、左手前の男の脇腹の熱さだけが、カーフのジャンパーを通してさえも、はっきりときわだって感じられ

るのだった。余分な脂肪のない、滑らかな男の肉体と、その下の骨の重みまでが、美也子の腕に確かに伝わる。

ある肉体には、不快感だけしか感じないのに別のある肉体に対して、こんなふうに一気に好感を覚えるのは、どういうわけだろう？ 皮膚が吸い寄せ合うような具合になり、今にも溶けあいそうだ。

めくるめくような奈落の感覚に、美也子の躰が微かに揺れた。男と接れあう面積がずっと広くなる。彼女のウールのジャケットも男のカーフのジャンパーもないも同然となり、二人は人知れず束の間の一体感を貪る。

「誰かと待ち合わせ？」たいして周囲の耳など気にせず男が急になれなれしい口調で訊く。

「女友だちと。何か美味しいものでも食べようかっていう、どうしようもない会の集まりなの」最後の、どうしようもない会、という言葉が当の本人の美也子を驚かせる。思わず口を突いたのだが、誰の耳にだって、あなた次第ではすっぽかしてもいいのよ、という風に聞こえはしなかっただろうか。彼女は内心うろたえた。

けれども雨の降り止むのを黙々と待っている周囲の男女は身じろぎもしない。皮肉な眼で美也子を見るものとていない。彼らには一様に大人しい羊のような、何かに耐えているという感じが漂っている。美也子は少し大胆になる。「そちらは？」と再びすくい上げる眼つきで男の顔を見上げる。

「似たようなもの」と男が片方の口の端を歪めて苦笑する。この状況で、そういう苦笑の仕方は効果的だった。男が続ける。「野郎共と、どっかにもぐりこんで飲もうって話。色気ないね。」

振ってやってもいっこうにかまわないんだが」

男は人気^{ひとけ}のぱったり途絶えた歩道を眺める。渋滞気味の車の波が、アスファルトに赤いテールランプを滲ませながら、ゆるゆると流れていく。

美也子の手がわずかに動いて男の手首に触れた。二人の視線が合う。

振っちゃいなさいよ、と美也子は眼で男に伝える。わたしも女たちをすっぱかすから。

声には出さないのに、すぐ前のOL風の若い女が首をわざわざねじって美也子を眺め、それから男の横顔を眺める。

その視線が逸^それるのを待って、今度は男の方が眼で訊^きねる。

振るのはいいけど、そしてどうする？

どこか、濡れた服が脱げる所へ行かない？ 服を乾かしている間に、わたしたちは一体感を貪^もるってわけ。

男はまたしても口の片側を歪ませて笑う。いいね。二人は同時に雨空を見上げる。白い飛沫のような雨が斜めに落ちてくる。

「でも止むかしら」

「ほとんど請けあうよ。俄か雨だもの」

男の言葉に、そこにいる一団もいっせいに空を見る。

秋の雨って嫌ね、と若い女の声がどこかで言う。なんか惨めったらしいのよね。せっかくの紅葉が色褪^あせるっていう感じで。

「でも街はきれいだよ」と美也子が男に話しかける。濡れて黒光りするアスファルトの上に、

建物からの明りがふんだんにこぼれ出ている感じだ。誰かがくしゃみをした。くしゃみをしたのが彼女でもあるかのように、男が不意に美也子に訊く。

「寒くない？」

少し風が出て来ていた。濡れた皮靴の中で、爪先だけがいつまでも冷たい。

男が寒くはないかと、親切心だか下心からか訊いたおかげで、美也子はぐっしりと濡れた自分の爪先のことになりだした。

ストッキングもたっぷり雨水を含んで、靴の皮の色が滲みこんでいるだろう。その中で皺がよってふやけてしまっている白い爪先。

おまえの足は死んだ魚みたいに冷たいな、と二年前に別れた夫が始終口にしていた言葉が、そのいかにも嫌悪感に溢れた言い回しと共に、美也子の耳に蘇る。

好きなうちはアバタもエクボで、その冷えた爪先をさえも慈しんでくれたものを。いつまでも温まらない新妻の足を両手で揉んだり、足の間にはさんだりして、温めようとしてくれたのは、しかしごく初めのうちだけで、少しするとベッドの中でちよつとでも触れるのを嫌がるようになった。

最後の方では、氷のような爪先が触れたと言って、いかにも気色悪そうに蹴とばしたりした。爪先が冷えているような夜には、欲望も全く湧かなかつた。美也子の離婚は、いわば冷たい爪先に象徴されるようなことが、結局原因となったような節がある。最初は足の先だけだったのに、ついには彼女自身まで——その肉体と、その精神をさして——夫は、死んだ魚みtainな女だと、吐き捨てるように言ったのだった。

雨のせいで、美也子の足の先には、ほとんど感覚がなくなっている。それが彼女にはわかった。

それを意識したとたん、躰の左側に今ではひたと張りついている見知らぬ男の肉体の熱さが、急に気になりだした。

美也子の浮かない表情を見て、男がもそもそとジャンパーを脱いで、無器用な仕種で彼女の肩にそれを置いた。

「やっぱり寒いんだ。顔が少し蒼いよ」男が少しだけ親しすぎる声でそう囁いた。

ふと見ると、美也子の眼の十センチほど前に、男の喉仏があった。

喉仏というものを、こんなに至近距離から、つくづくと眺めたことは、かつてなかった。瘦せた鶏みみたいな首だと思い、ちよつと前までのひそかな肉体的陶醉が信じられないことのように、記憶から遠ざかった。眼を背けるかわりに、魅せられたように彼女は男の飛びだした喉仏を凝視した。

なんて醜惡なものなのだろう、と彼女は眉をひそめる。男が唾液を飲みこむたびに、大きく上下する。

喉で上下する喉仏は耐え難いほどグロテスクに美也子の眼に映った。彼女は思わず躰を引いて、男との間に、ほんのわずかであるが隙間を作った。男が意味もなく微笑した。

その微笑はもう彼女が好きな酷薄な感じがせず、むしろ卑しく貧相に感じられた。

皮ジャンパーの下に男は茶色い背広の上着を着ていた。白いYシャツの衿からぶらさがっているねばけたようなストライプのネクタイの下の方に、何かの染みがついている。彼はもはや